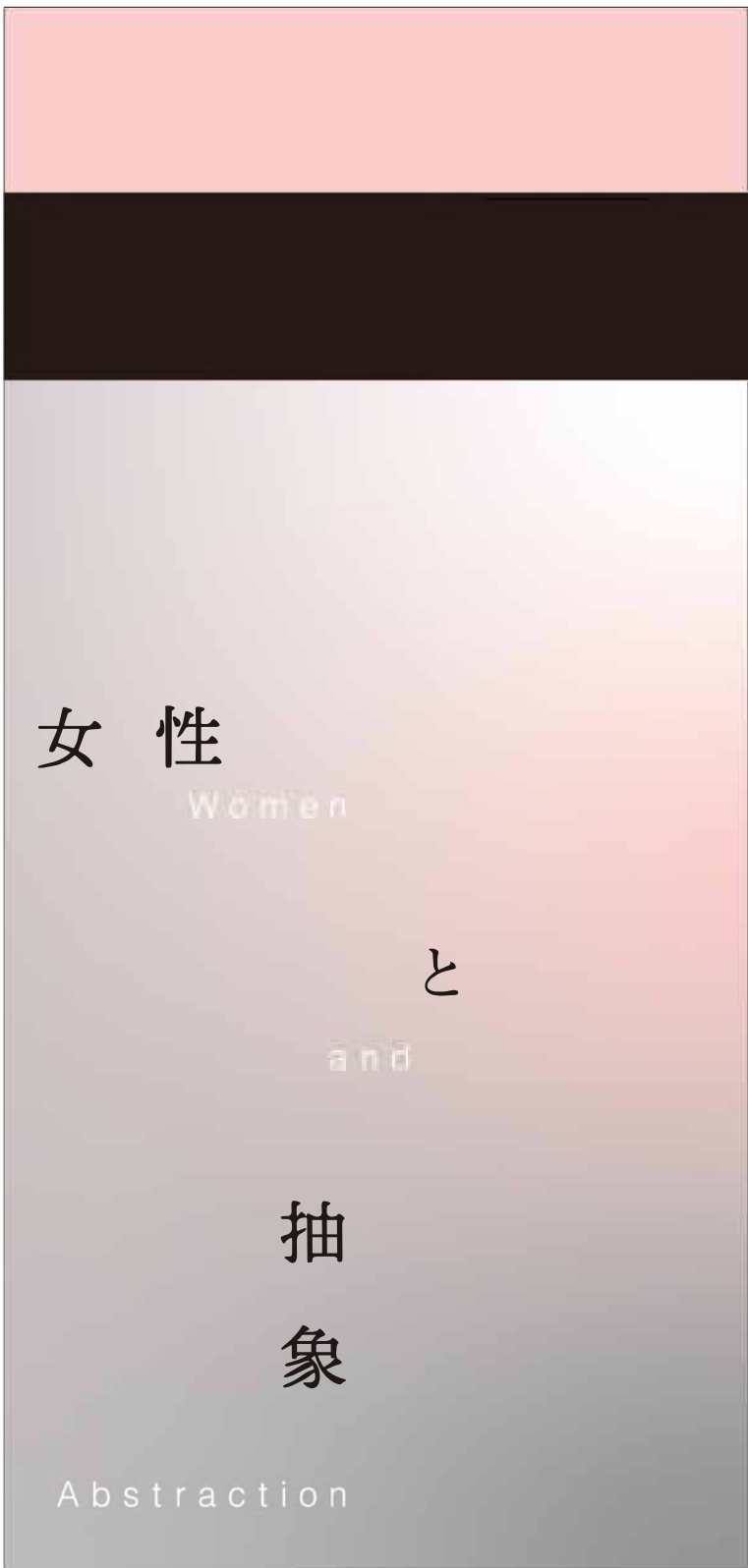




近年、海外では台北市立美術館の「她的抽象（彼女の抽象）」展（2019年）や、ポンピドゥ・センターの「Elles font l'abstraction（彼女たちは抽象芸術を作る）」（2021年）など、女性のアーティストによる抽象芸術をテーマにした展覧会が開催され、既存の美術史における「抽象芸術」の枠組み自体を問い直すとともに、個々の背景をもつ女性のアーティストによる抽象表現を再評価する試みが進んでいます。

本展は3つの章で構成され、戦後から現代まで、当館のコレクションから多様な抽象表現を紹介します。1章「女流画家協会」では、戦後まもなく女性たちの連帯によって結成された同会に参加したアーティストの抽象的な作品を取りあげます。2章「増殖する円」では、円のモチーフを増殖させることで空間を作りあげた作品に注目します。3章「抑制と解放」では、大胆な省略や要素の純化によって抽象的な表現へと至った作品を集めています。

本展が抽象芸術に新たな視点をもたらすきっかけとなれば幸いです。

In recent years there have been several exhibitions overseas focusing on abstraction by artists that identify as female, whom we refer to as “artist women,” such as the *The Herstory of Abstraction in East Asia* at Taipei Fine Arts Museum (2019) and *Women in Abstraction* at the Centre Pompidou (2021). These exhibitions questioned the framework of abstraction within existing art history while also seeking to reevaluate abstract art by women artists, each of whom has her own unique background and context.

This exhibition, divided into three sections, draws on the museum’s collection to present diverse forms of abstraction from the immediate postwar period to the present day. Section 1, “Women Artists Association,” focuses on abstract works by members of an art association formed by women shortly after the war in a show of solidarity. Section 2, “Proliferating Circles,” highlights artworks that create spaces by multiplying the motif of the circle. Section 3, “Suppression and Liberation,” brings together works by artists who arrived at an abstract mode of expression through bold simplification and purification of elements.

Our hope is that this exhibition will offer new and compelling perspectives on abstract art.

女流画家協会

1

最初のセクションでは、戦後の女性のアーティストたちの連帯を示す女流画家協会を取りあげます。終戦の翌年に日本橋の北^{ほく}庄^{そう}画廊で開催された「現代女流画家展」に参加した三岸節子と藤川栄子を中心となり、桜井浜江、桂ゆき（ユキ子）ら11名の発起人によって、女流画家協会が1947年に発足します。創立会員は73名。発会式で三岸は、「今まで世の中は常に男性優先で女流画家は無念の苦杯をなめさせられていた。女流は社会的な基盤もなく、経済的な安定もない」と語り、連帯の必要性を訴えたといいます。「女流画家の団結により芸術的向上を計り、又新人の登竜門としての意味を以て展覧会を計画す」という目標を掲げた同会は、当初より官展系と在野系の超会派としてスタートしており、抽象という新たな絵画表現を受け入れる土壌がありました。発起人だった三岸、藤川、桂、桜井のほか、田中田鶴子は第1回展から、芥川（間所）紗織は第8回展から参加しています。

Sakurai Hamae (1908-2007)

絵具に不自由し、発表の機会も減った戦時中を経て、小さなキャンパスの壺と花のシリーズが生まれました。ペインティングナイフで絵具を重ねた画面は、再現的な描写や作為的な痕跡を最小限にとどめ、抽象的な絵肌をあらわにしています。1946年に現代女流画家展を訪れた美術評論家の田近憲三が、同展に出品されていた《壺》にいたく感動して購入、別の機会に得た《花》とともに長く愛蔵し、本人没後、夫人によって当館に寄贈されました。



桜井浜江《壺》1946年／《花》1947年

桜井浜江

山形県生まれ。17歳の時にもちあがった縁談を拒否して1926年に上京。女子美術学校（現・女子美術大学）への入学を望むも、両親の承認が得られず断念。1928年には1930年協会洋画研究所に入り、里見勝蔵らの指導を受け、やがて里見らが結成した独立美術協会に出品するようになる。その一方、三岸節子らとともに1934年には女艸会、1947年には女流画家協会を結成。生涯を通して、ペインティングナイフを用いた重厚で荒々しいマチエールの油彩に取り組んだ。

Migishi Setsuko (1905-1999)

三岸は1950年前後から卓上の花瓶や果物など日常的な題材に取り組み、静物画家としてキャリアを確立していきました。一方で、1957年には体調不良から軽井沢の山荘に移り、黙々と絵画制作に打ち込むようになります。本作も軽井沢在住期に描かれた作品です。絵具を塗っては削りながら何層にも重ねられた画面は、対象の本質に迫り、自分自身とも対峙するような内省的な雰囲気宿しています。



三岸節子《静物》1963年

三岸節子

愛知県生まれ。画家を志して1921年に上京し、岡田三郎助に師事。その後、女子美術学校（現・女子美術大学）に進学し、首席で卒業する。70年以上の画業の中でフランス絵画の造形要素を積極的に取り入れ、マティスやボナールの絵画の色彩や構図を取り入れた作風や、ブラックの影響が感じられる重厚感のある色彩とマチエールの作風などを展開した。女艸会、七彩会、女流画家協会の結成に参加するなど、女性のアーティストの地位向上にも努めた。

1945年3月10日未明に発生した東京大空襲で、田中は自宅を焼失します。その時、燃えていく家の中で「炎の円の中心に、なんの音もしない、シンとした無の世界」を体験します。これが強い印象を残し、その後の制作に大きな影響を与えます。タイトルにある無は、無の空間とタイトル「無し」の二つの意味があったと田中は回想しています。本作は、1960年5月に東京都美術館で開催された第4回現代日本美術展に《無I》とともに出品され、女性初の優秀賞を受賞しました。



田中田鶴子《無 II》1960年

Tanaka Tazuko (1913-2015)

田中田鶴子

朝鮮の仁川生まれ。16歳まで中国の青島で過ごし、以後東京に移る。1937年、多摩帝国美術学校（現・多摩美術大学）女子部第一期生として入学。1947年、女流画家協会結成に参加。1960年、第4回現代日本美術展で女性として初の優秀賞受賞。茫漠とした空間や時間、無をテーマに描いた。1970年代からは、跡見学園女子短期大学で教鞭をとるかたわら、中近東の砂漠に魅せられ何度も同地に赴き、砂漠の中に永遠の時間を見出して、それを円と線で表現した。

キュビズムへの傾倒を経て、藤川は1959年から本格的に抽象的な表現に取り組むようになりました。すでに対象の形態の解体を推し進めたキュビズム期の作品に、抽象の萌芽は見られましたが、ここでは、《塊》というタイトルの通り、黄色みのある絵画空間の中に、独特のマチエールをもついくつかの黒い塊が浮遊しています。純粹な抽象に取り組んだのはわずか数年で、藤川はこの時期の探究を糧に、抽象と具象が入り混じった作風へと向かいま



藤川栄子《塊》1959年

香川県生まれ。上京後、同郷の彫刻家、藤川勇造との結婚を機に藤川と安井曾太郎から絵を学ぶ。1927年の二科展に初入選後、同展に出品を続ける。1947年には三岸節子らと女流画家協会を結成。初期には写実的な裸婦像を描き、1953年のフランス遊学を機に、キュビズムの影響が色濃い作風へと変化する。やがて、1959年からは色彩と形態による抽象表現へと向かい、抽象と具象を交えた画風へと展開した。晩年には、淡い色彩の抒情性のある作品を残した。

Fujikawa Eiko (1900-1983)

藤川栄子

重なり合うシート状のコルクが、まるでキャンバスからによきによきと生えているようです。桂は1930年代から油彩制作と並行して、コルクやレース、新聞紙などをコラージュした前衛的な作品を手がけていました。特に好んだコルクは戦争により輸入が途絶えたこともあり、戦後はコラージュのようにリアルに素材を描き分けた絵画や、社会風刺やユーモアを込めた絵画を発表。本作は、1970年代に再びコルクを用いるようになった時期のものです。



桂ゆき（ユキ子）《作品》1978-79年

東京都生まれ。当初両親の勧めで日本画を学ぶも、油絵修学を希望して中村研一や岡田三郎助に師事する。やがてアカデミックな絵画に不満を持ち、アヴァンギャルド洋画研究所に通う。以降、二科展、および設立に加わった丸室会、女流画家協会などで作品を発表。1956年から6年間フランス、アメリカに滞在し、現地の展覧会にも積極的に参加。戦前からコラージュによる前衛的な作品を発表し、戦後は生活用具や生き物を描いた自由な作風を展開した。

Katsura Yuki (Yukiko) (1913-1991)

桂ゆき（ユキ子）

間所は1950年代から鮮やかな色彩の染色画を発表し始め、新進気鋭の前衛美術作家として初期から高い評価を得ました。1960年代、アメリカへの留学を経て油彩画に転じた後は、それまで描いていた具象的なイメージから離れ、赤、黒、白などの限られた色彩によって画面を構成するようになります。本作は1965年の第19回女流画家協会展に出品され、その後の展開が期待されましたが、間所はこの翌年に42歳で早逝しました。



芥川（間所）紗織《スフィンクス》1964年

愛知県生まれ。東京音楽学校（現・東京藝術大学）本科声楽部卒業。1950年から野口道方にろうけつ染を、猪熊弦一郎に油彩を学ぶ。大胆な色彩と線描でデフォルメされた女性像を描く「女」シリーズが高く評価され、1955年には二科展の岡本太郎室（第九室）に出品。その後も日本の神話や民話に取材した作品を発表し、画家としての評価を高めていった。1960年に渡米し、アート・スチューデント・リーグで油彩を学んだ後、油彩による抽象画を手がけた。

Akutagawa (Madokoro) Saori (1924-1966)

芥川（間所）紗織

増殖する円

2

抽象芸術は、現実にあるものの外観や眼に見える景色を模倣することなく、形、線、色彩によって構成されます。眼に見える世界に起点をもつものから、自己の内面的な感情を色や形で表すもの、具象的なものとは無縁に純粹に線やマチエールのリアリティを追求するものまで、表現はさまざまです。表現された形に似たものを探すならば、一つには、円があります。円は抽象的な表現に多用されるモチーフですが、ここでは、増殖するように広がる円が特徴的な作品を中心に集めました。もちろん、円という造形的な共通性をもつとはいえ、そこにはそれぞれの円があります。たとえば、福島秀子にとって円は生命を象徴する重要なモチーフです。青木野枝にとっては、円は自らの分身でもあり、光や水蒸気が空間に現れる現象そのものでもあります。円という形には、アーティストそれぞれの多様なイメージが込められているのです。この章では、増殖する円がもつ可能性と魅力に注目します。

Kusama Yayoi (1929-)

草間彌生は、幼い頃から視野の全域が赤い花の形で埋めつくされたり、物体のまわりにオーラが見えたりといった幻視体験に悩まされてきたといいます。そんな彼女にとって作品の制作は、自らのヴィジョンが唯一無二のリアリティであることの確認であり実証でした。ネット絵画の初期作である《No. H. Red》では、黒地の画面を赤色の微細なタッチで埋めつくすことによって、画面（視野）全体が震えるように、揺らめくように生動しています。



草間彌生《No. H. Red》1961年

草間彌生

長野県生まれ。京都市立美術工芸学校（現・京都市立銅駝美術工芸高等学校）で日本画を学んだ後、1950年代より水彩や油彩を用いた制作を始める。1957年に渡米し、翌年ニューヨークに移住。微細な網の目がキャンバスを埋め尽くす「ネット・ペインティング」や、男根をモチーフにした無数の突起物がオブジェを覆う「ソフト・スカルプチュア」など代表作となる重要なシリーズを発表した。1973年以降は拠点を日本に移し、国内外で大規模な個展を開催。世界的なアーティストとして高い評価を得ている。

鉄でできた丸いモチーフがいくつも積み重なっています。本来は重たい鉄ですが、塊ではなく線状になることで、反対側の景色を垣間見せつつ軽やかに立ち上がっています。《雲谷 2018-I》は2002年から始まるシリーズ作品です。作者は滞在制作した山の中で霧が立ち込めた経験を機に、霞のような彫刻を作りたいと思ったそうです。光や水蒸気といった質量を持たない対象をモチーフとすることが多い青木の作品ですが、本作も同様に、重量感において落差のある鉄と霧との取り合わせが特徴的です。

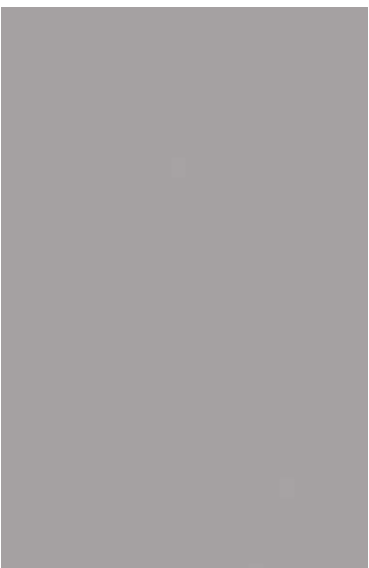


青木野枝《雲谷 2018-I》2018年

青木野枝

東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業後、同大学院造形研究科彫刻コース修了。学生の頃から鉄を素材に使う。工業用の鉄板に石筆で複数の円を描き、自ら溶断、溶接して繋いでいくことによって組み上げていく彫刻作品を制作。物質として重い鉄を使いながらも、空間が透ける構造により上昇するような軽やかさをもつのが特徴である。地元の人との交流を大切にしたコミッションワークによる屋外彫刻も多数手がけている。

音や光や色の表現に関心をもっていた田中は、1956年に東京の小原会館で開催された第2回具体美術展で、ついたり消えたりする数百の色電球とコードによってできた《電気服》を発表します。この作品のためのドローイングには、円（電球）と曲線（コード）の絡み合う様子が描かれていましたが、それがやがて、本作のような絵画作品へと発展していきました。素材に、油絵具ではなくて、もっと滑らかな表面ができあがる合成系の樹脂が使われているのも特徴です。

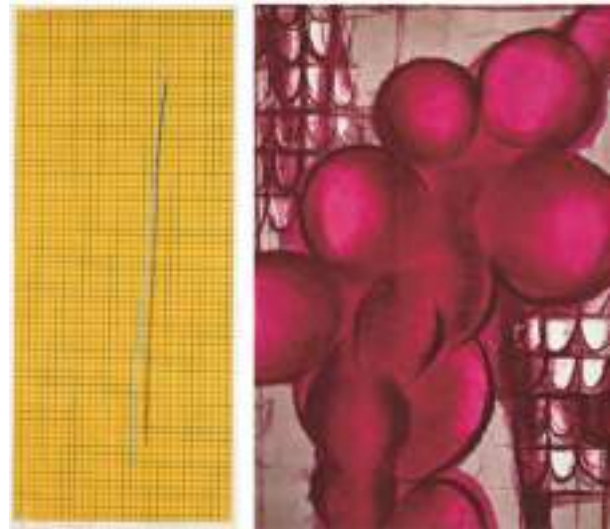


田中敦子《作品 66-SA》1966年

田中敦子

大阪府生まれ。京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）中退。1955年から吉原治良の創設した具体美術協会の会員となる。第2回具体美術展（1956年）では、約200個の電球・管球を身に着けた《電気服》を発表。1957年から晩年に至るまで、電球やコードを思わせる円と線で構成された絵画に取り組む。電化製品や合成樹脂を素材にするなど、戦後の産業発展とともに普及した工業製品を用いることで、新たな作品形態を探索した。

1970年代は、ミニマルでコンセプチュアルな表現がアート界を席卷していました。そんな時代に画家として歩み始めた辰野も、当初はグリッドによる作品を制作しています。でも、幾何学的な線の上にフリーハンドで引かれた斜めの線が、辰野のその後の展開を予見しているようです。1979年以降、その作品には有機的な線や重量感のあるフォルムが登場します。辰野は描く行為の繰返しの上に、「実在感をもった絵画」を追い求めました。



辰野登恵子《UNTITLED-28》1974年／《May-7-91》1991年

長野県生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業後、同大学院修士課程修了。1970年代にグリッドやストライプという幾何学的な構造をもつ版画やドローイングを手がける。1979年以降は油彩に転じ、S字や矩形、円といった有機的な線やフォルムと、異なるトーンや明度の色彩を組み合わせ、実在感をもった絵画空間に取り組む。外部にある対象の再現ではなく、キャンバスに絵筆を重ねることで徐々に構築されていく絵画の可能性を追求し続けた。

辰野登恵子

Tatsuno Toeko (1950-2014)

福島にとって「人」のかたちは、活動初期の1940年代後半から1950年代後半まで主要なモチーフでした。本作は目が主題ですが、タイトルにも表れているように、目そのものを描くというよりも、何かを強く激しく見つめる行為そのものを可視化しようとしているようです。1950年代半ば、福島は円や線の型押しによる独自の画風を生み出します。本作の中で円は眼球と瞳孔に表れ、光線のようなものが墨の型押しで放射状に、一部は横切るように伸びています。



福島秀子《凝視》1956年

東京都生まれ。1943年、文化学院女学部卒業。1948年、日本アヴァンギャルド美術家クラブ主催のモダンアート夏期講習会に参加。そこで出会った北代省三、山口勝弘、柳田美代子らと七耀会を結成。1951年、実験工房の結成に参加。実験工房では、主に舞台美術や衣装デザインを担当。実験工房の活動と並行して、画家としても活動。1950年代半ばには絵筆を使って描くのではなく「捺す」ののだとして、缶の底などさまざまなもので型押しする独創的な画風を確立した。

福島秀子

Fukushima Hideko (1927-1997)

抑制と解放

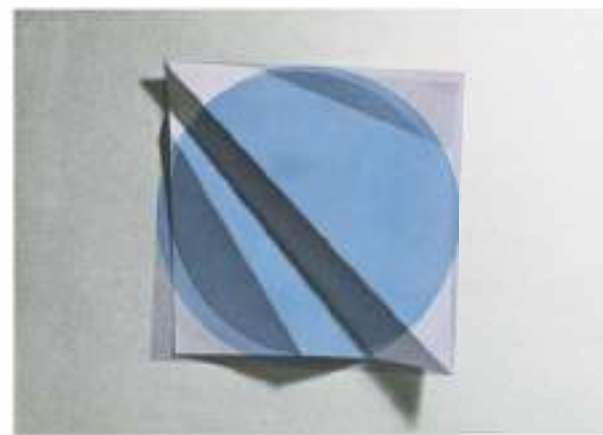
3

1960年代以降、絵画や写真などの表現の形式を批評的にとらえ、制作のプロセスや行為に着目した作品が多くみられるようになりました。作家たちは対象を写實的に表すのではなく、作品の背後にある思考と制作の方法論そのものを理知的に結びつけながら、独自の表現を確立させました。

色の特性に注目し、その表現性を幾何学的構成の中で探求した吉川静子。二次元と三次元の視点を重ねあわせ、視覚と認知の差異を鮮やかに示す木下佳通代。ミニマルな反復行為によって、画材の物質性を浮き彫りにする沢居曜子。写真を「光」と「影」に還元し、実験的で自由なイメージを紡ぐ杉浦邦恵。極限的な露出で場所の意味を蒸発させ、真新しい光景を写し出す春木麻衣子。5人の作品は一見もの静かですが、見るほどに発見があり、印象が変化します。大胆な省略や要素の純化による抑制的な表現は、私たちのものの見方をときほぐし、想像力を解放する力を秘めているのです。

Kinoshita Kazuyo (1939-1994)

円が描かれた四角い紙を折りたたんで写真に撮り、それを現像した印画紙の上に、もとの円と同じサイズの円をアクリル絵具で描くという工程がとられています。鑑賞者の視線は、ざらつきのある印画紙とアクリルの青い色面、折りたたまれてゆがんだ円と正円の間をなぞるように行き来し、その差異を感じます。1970年代後半に集中的に制作されたこのシリーズでは、物質として存在する事物と、概念的なイメージの関係が端的に示されました。



木下佳通代〈'79-38-A〉1979年

木下佳通代

兵庫県生まれ。京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）西洋画科卒業。1960年代から、存在論的なテーマに関心を寄せる美術家団体「グループ〈位〉」の活動に携わる。1970年代には写真やドローイングによって、人間の知覚や、世界における存在のありかたを問う作品を発表。1980年代には絵具を塗っては布で拭いとる手法の油彩作品を発表し、ストロークの重なりによって複雑な奥行きがもたらされる独自の絵画表現を確立した。晩年はがん治療をしながら制作を続け、1994年に55歳で逝去した。

Sawa Yoko (1949-)

大きな紙に太い矩形の線が左上から右下に伸びて、だんだん薄くなっていっている、ように見えるでしょうか。よく目を凝らして見てください。じつは、支持体の紙にはカッターナイフで等間隔の切り込みが入っています。フリーハンドで平行に入れられた切込みに、コンテで直角に線を引くことで表面の溝が浮かびあがり、線となっています。計画的かつ反復的な線によって作品の物質性が際立ちますが、線の切込みにには作者の息づかいや身振りの痕跡も同時に感じられます。



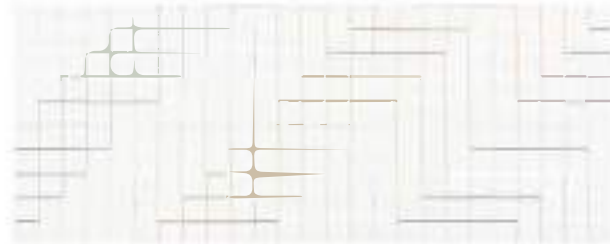
沢居曜子《Line Work IV-77-3》1977年

沢居曜子

三重県生まれ。京都市立芸術大学西洋画専攻科修了（大学院）。1977年、第1回現代日本版画大賞展入選。1983年「現代日本の新世代展」出品後、1991年まで作品発表を中断。1970年代より支持体の紙にカッターナイフで等間隔に切り込みを入れ、そこにコンテで線を重ねて溝を浮かびあがらせる「Line-Work」シリーズを展開。ドローイングとオブジェの境界に揺さぶりをかけ、絵画の原点を問う試みを行った。

Yoshikawa Shizuko (1934-2019)

コンクリート・アートの典型例のひとつ。コンクリート・アートとは、対象を持たない、つまり純粋な抽象美術のことで、戦後のスイスやドイツでは重要な動向です。作者はチューリッヒのヨーゼフ・ミュラー＝ブロックマンのデザイン・スタジオに勤める中でさまざまな芸術家たちに刺激を受け、1970年代から制作活動を開始しました。階段状のブロックの側面に色彩が施された本作は、見る者の立ち位置によって色を変化させます。



吉川静子《色影》1979年
© Shizuko Yoshikawa and Josef Müller-Brockmann Foundation

吉川静子

福岡県生まれ。津田塾大学英文学科、東京教育大学（現・筑波大学）工芸建築科を卒業後、1961年にドイツのウルム造形大学に留学してビジュアル・コミュニケーションを学ぶ。チューリッヒでデザインの仕事に従事した後、70年代からコンクリート・アート（具体芸術）の作家として色彩理論に基づく幾何学的なレリーフや平面作品を発表。光と色が響き合う作品は、終生にわたり音楽を愛した吉川が自作について語った「色で歌っている」という言葉と重なる。

ニューヨークを拠点に活動する杉浦は1980年代から暗室内で印画紙の上に直接ものを置き、その痕跡を露光して像を得るフォトグラムの制作を続けています。モチーフに花を使い始めた当時、周囲からはネガティブな反応しか得られなかったといいます。それでも自身が選んだ方法による制作を続けました。杉浦独自の視点と、海外で写真を制作する日本出身の女性という複合的な属性が交差した作品は、1997年ニューヨーク近代美術館に収蔵される等、アメリカでの評価が示されることになりました。



杉浦邦恵〈Botanicus 18〉1989年

杉浦邦恵

愛知県生まれ。お茶の水女子大学物理学科を中退し、1963年に単身渡米、シカゴ美術館付属美術大学でニュー・バウハウスの流れを汲む写真教育を受ける。1967年同校卒業直後にニューヨークへ拠点を移し、現在まで同地で制作を続けている。感光材料を塗布したキャンバスにイメージを定着させたフォトキャンバス・シリーズや写真と絵画を組み合わせた写真－絵画シリーズ、フォトモンタージュやフォトグラム等、自由な実験精神と制作プロセスによって既存の技法や写真の枠を取り払い、独自の表現様式を展開している。

春木は世界各地を旅しながら、いくつかのポートレートシリーズを手がけてきました。たとえば本作は、ロンドンの大英博物館で撮影されています。館内を行き交う人々をとらえながらも、極端な露出に設定することで、全体が白で覆われた抽象度の高い画面が生み出されています。春木が意識を向けたのは、撮影地域の環境によって微細に異なる光のありようでした。つまりこの作品は、人のたたずまいや存在感を変化させる光そのものにも注目しているのです。



春木麻衣子〈outer portrait 1〉2009年

春木麻衣子

茨城県生まれ。玉川大学文学部芸術学科卒業。在学中にロンドン大学のゴールドスミス・カレッジへ交換留学。画面全体が白や黒で覆われたポートレートシリーズを発表し注目を集める。2008年、「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」展(森美術館)で特別賞、2015年に第31回写真の町東川賞で新人作家賞を受賞。2017年度には文化庁新進芸術家海外研修員として渡仏。光と影を注視する清閑な写真表現によって、見る人をさまざまな思索に導く作品を展開し続けている。

企画者座談会

横山：本企画の発案者である小川さん、企画のきっかけは何ですか？

小川：海外の美術館で、女性のアーティストによる抽象芸術をテーマにした展覧会が近年いくつか開催されていて、当館のコレクションから日本の女性の作家による抽象表現の変遷や多様さが見えてくる展示ができれば良いなと思ったのがきっかけです。

横山：女性の作家について今後も継続して調査していくために、希望者を募り、美術課のスタッフ計6名で企画することになりました。たまたま全員女性でしたが、みなさん参加してみていかがでしたか。

小林：出展作家を考える中で、どのような女性の作家がコレクションに欠けているかなど、全員で話すことで作品収集にまつわる課題を共有できた点が良かったです。

横山：そうですね。そして収蔵されている作品でも、過去ほとんど展示されていなかったり、解説のない作品も多かったです。今回、分担して新たに16本の解説を書き下ろしました。

佐原：すでにストックされていた解説の中にも、女性の作家に対して「女性作家」や「女性アーティスト」という言葉が使われていたり、配偶者や家族（著名な男性）に言及されていることがあったのですが、今回はそういった不均衡な前提について議論できたのが非常に重要だったと思います。

松田：時代による性差のとらえ方の違いを感じました。当初「女性」や「女流」と前置きすることは、シンプルな区分だった。けれども次第に差別的なニュアンスが付されるようになっていく。作品紹介の際に年齢や容姿について言及するものや、既存の価値観にとらわれない表現を推奨する批評家が、女性の作家に対してひどく偏った発言をしている記事を見た時は驚きました。表現は自由なはずですが、それを取り巻く環境は封建的だった。そうした雰囲気の中で制作するとはどんなことだったのかを改めて考えさせられました。

堀田：一方で、キュレーターや研究者である女性の先達たちの活動を追うことが、作家と作品の調査を進めるうえで非常に大きな導きになりました。彼女たちの足跡が展覧会図録や研究紀要、書籍として残ることで、その後のさらなる研究が進むだけでなく、作家と作品の評価、美術館での作品収集と保存というところにまで繋がっていくと思います。

横山：今回の企画の背景にも、他館で開催された女性と抽象にまつわる展覧会への連帯を示したいという思いがありましたね。さらに出品作家どうしの連帯も浮かびあがりました。

小川：女流画家協会は女性たちの連帯によって生まれましたが、実は設立に関わった人たちは早い時期に退会しています。最初は驚きましたが、同会発足は目的がはっきりしていたので、達成したと感じて各々の活動を

重視していったのも納得でした。

小林：写真の分野では、女流写真家協会という団体が1958年に結成されました。ただ、それからほどなくして自然解散してしまったため、残っている資料も多くありません。設立の経緯はいかなるものだったのかを含め、今後その内実を調査したいです。

小川：協会設立による連帯以外でも、同世代の辰野登恵子と沢居曜子は、1976年と1977年の2度、京都のギャラリー射手座（2011年閉廊）で2人展を開催しています。両者ともグリッドによる先鋭的な作品を制作していた頃で、この時期の2人にも連帯がみられます。近年でこそ、女性のアーティストによるコレクティブをよく目にしますが、今回調査する中で、女性の作家たちの個人的な連帯を見出すことができました。

横山：最後に、今後の展望について、いかがでしょう。

小林：今回は異なるメディアも特集してみたいです。たとえばフェミニズムと関連する映像表現やパフォーマンスの展開をたどる企画を考えています。

佐原：作品収集や展覧会企画におけるジェンダーパランスの是正は、大きな課題のひとつですね。今後も積極的に携わり、既存の美術史の再検討を促す土壌を作っていきたいです。

主要参考文献

■ 女性と抽象をテーマにした展覧会カタログ・文献

《她的抽象（The Herstory of Abstraction in East Asia）》、台北市立美術館、2019年

Elles font l'abstraction, Éditions du Centre Pompidou, 2021

Labyrinth of Forms: Women and Abstraction, 1930-1950, Whitney Museum of American Art, 2021-2022 [website]

Action Gesture Paint: Women Artists and Global Abstraction 1940-70, Whitechapel Gallery, 2023

■ 出品作家個展カタログ・作品集

『藤川栄子回顧展』香川県文化会館、1985年

『田中鶴子展—情円と線—』ストライプハウス美術館、1988年

『第12回オマーージュ瀧口修造 福島秀子展』佐谷画廊、1992年

『木下佳通代 1939-1994』AD&A、1996年

『沢居曜子展 Line-Work Series in 1970's』galerie 16、1998年

『生涯100年記念 三岸節子展 永遠の花を求めて』（会場：平塚市美術館、北海道立三岸好太郎美術館、一宮市三岸節子記念美術館ほか）朝日新聞社、2005年

『生涯100年記念 桜井浜江展』山形美術館、2008年

『芥川紗織展』横須賀美術館、一宮市三岸節子記念美術館、2009年

『田中敦子—アート・オブ・コネクティング』アイコンギャラリー、カステジョン現代美術センター、東京都現代美術館、2011年

春木麻衣子『possibility in portraiture』1223現代絵画、2011年

『生涯百年 桂ゆき ある寓話』東京都現代美術館、下関市立美術館、2013年

『辰野登恵子 ON PAPERS: A retrospective 1969-2012』（会場：埼玉県立近代美術館、名古屋市美術館）青幻社、2018年

『杉浦邦恵 うつくしい実験／ニューヨークとの50年』東京都写真美術館、2018年

『Shizuko Yoshikawa 吉川静子』Lars Müller Publishers、2018年

■ その他

『奔る女たち 女性画家の戦前・戦後 1930-1950年代』栃木県立美術館、2001年

『前衛の女性 1950-1975』栃木県立美術館、2005年

中嶋泉『アンチ・アクション—日本戦後絵画と女性画家』ブリュッケ、2019年

吉良智子『女性画家たちと戦争』平凡社、2013年

作品リスト | List of Works

作品はすべて東京国立近代美術館蔵
All works are from the collection
of the National Museum of Modern Art, Tokyo

1
女流画家協会
Women Artists
Association

桜井浜江
壺
1946年
油彩、キャンバス
53.5×45.5 cm
田近三重子氏寄贈
Sakurai Hamae
Vase
1946
Oil on canvas
Gift of Tajika Mieko

桜井浜江
花
1947年
油彩、キャンバス
73.0×61.0 cm
田近三重子氏寄贈
Sakurai Hamae
Flowers
1947
Oil on canvas
Gift of Tajika Mieko

三岸節子
静物
1963年
油彩、キャンバス
97.5×130.5 cm
作者寄贈
Migishi Setsuko
Still Life
1963
Oil on canvas
Gift of the artist

藤川栄子
塊
1959年
油彩、キャンバス
91.0×116.5 cm
文部省管理換
Fujikawa Eiko
Mass
1959
Oil on canvas
Transferred from Ministry of
Education

田中田鶴子
無 II
1960年
油彩、キャンバス
89.5×130.0 cm
購入
Tanaka Tazuko
Void II
1960
Oil on canvas
Purchased

芥川（間所）紗織
スフィンクス
1964年
油彩、キャンバス
130.0×162.0 cm
間所幸雄氏寄贈
Akutagawa (Madokoro) Saori
Sphinx
1964
Oil on canvas
Gift of Madokoro Yukio

桂ゆき（ユキ子）
作品
1978-79年
コルク、板
162.0×130.5 cm

購入
Katsura Yuki (Yukiko)
Work
1978-79
Cork on board
Purchased

193.8×130.8 cm
購入
Tanaka Atsuko
Work 66-SA
1966
Vinyl resins on canvas
Purchased

2
増殖する円
Proliferating
Circles

草間彌生
集積の大地
1950年
油彩、エナメル、麻布（種袋）
72.5×91.0 cm
購入
Kusama Yayoi
Earth of Accumulation
1950
Oil and enamel on seed sack
Purchased

草間彌生
No. H. Red
1961年
油彩、キャンバス
157.0×142.0 cm
購入
Kusama Yayoi
No. H. Red
1961
Oil on canvas
Purchased

田中敦子
作品 66-SA
1966年
ビニール樹脂、キャンバス

青木野枝
雲谷 2018-I
2018年
鉄
207.0×163.4×150.0 cm
購入
Aoki Noe
Moya 2018-I
2018
Steel
Purchased

福島秀子
ビンの中
1955年
水彩、紙
36.0×27.0 cm
購入
Fukushima Hideko
In the Bottle
1955
Watercolor on paper
Purchased

福島秀子
無題
1955年頃
水彩、紙
27.5×30.0 cm
購入
Fukushima Hideko
Untitled
c. 1955
Watercolor on paper
Purchased

福島秀子
宇宙線シャワー
1955年頃
水彩、紙
36.0×27.0 cm
購入
Fukushima Hideko
Cosmic Rays Shower
c. 1955
Watercolor on paper
Purchased

福島秀子
 凝視
 1956年
 水彩、コンテ、紙
 66.0×48.0 cm
 購入
 Fukushima Hideko
Fixed Gaze
 1956
 Watercolor, conté on paper
 Purchased

辰野登恵子
UNTITLED-28
1974年
シルクスクリーン
92.8×39.5 cm
購入
Tatsuno Toeko
UNTITLED-28
1974
Silkscreen
Purchased

辰野登恵子
May-7-91
1991年
リトグラフ
191.5×130.0 cm
シロタ画廊寄贈

Tatsuno Toeko
May-7-91
1991
Lithograph
Gift of Shirota Gallery

3 抑制と解放 Suppression and Liberation

木下佳通代
'79-38-A
1979年
アクリリック、写真
エイ・ディ・アンド・エイ (駒田哲夫氏)
寄贈
51.0×72.0 cm
Kinoshita Kazuyo
'79-38-A
1979
Acrylic on photograph
Gift of AD & A (Komada Tetsuo)

沢居曜子
Line Work IV-77-3
1977年
コンテ、ケント紙
60.0×90.0 cm
山口孝氏寄贈
Sawai Yoko
Line Work IV-77-3
1977
Conté on paper
Gift of Yamaguchi Taka

吉川静子
色影
1979年

ラッカー、アクリリック、ポリエステル
 50.0×125.0×8.0 cm
 吉川 静子・ヨーゼフ・ミュラー＝ブ
 ロックマン財団寄贈
 Yoshikawa Shizuko
Color Shadow
 1979
 Lacquer and acrylic on polyester
 Gift of Shizuko Yoshikawa
 and Josef Müller-Brockmann
 Foundation

吉川静子
変化ー2
1987年
テンペラ、アクリリック、キャンバス
165.0×67.0 cm
吉川静子・ヨーゼフ・ミュラー＝ブ
ロックマン財団寄贈
Yoshikawa Shizuko
Alteration-2
1987
Tempera and acrylic on canvas
Gift of Shizuko Yoshikawa
and Josef Müller-Brockmann
Foundation

杉浦邦恵
孤 #57-V1
1967年
発色現像方式印画
18.4×24.3 cm
作者寄贈
Sugiura Kunié
Cko #57-V1
1967
Chromogenic print
Gift of the artist

杉浦邦恵
Botanicus 18
1989年

セラチン・シルバー・プリント
124.0×103.9 cm
購入
Sugiura Kunié
Botanicus 18
1989
Gelatin silver print
Purchased

春木麻衣子
outer portrait 1
2009年
発色現像方式印画
124.0×158.0 cm
黒田賢三氏寄贈
Haruki Maiko
outer portrait 1
2009
Chromogenic print
Gift of Kuroda Kenzo

春木麻衣子
outer portrait 4
2009年
発色現像方式印画
124.0×158.0 cm
黒田賢三氏寄贈
Haruki Maiko
outer portrait 4
2009
Chromogenic print
Gift of Kuroda Kenzo

コレクションによる小企画
女性と抽象
2023年9月20日(水)–12月3日(日)
東京国立近代美術館
ギャラリー4

From the Museum Collection
Women and Abstraction
 September 20 – December 3, 2023
 The National Museum of Modern Art, Tokyo
 Gallery 4

企画・編集・執筆
小川綾子、小林紗由里、佐原しおり、
堀田文、松田貴子、横山由季子

Curators and Editors
Ogawa Ayako, Kobayashi Sayuri, Sahara Shiori,
Hotta Aya, Matsuda Takako, Yokoyama Yukiko

翻訳
クリストファー・スティヴンズ

Translation
Christopher Stevens

撮影
大谷一郎 (p. 14)

Photographer
Otani Ichiro (p. 14)

デザイン
鈴木晴奈
(Design Studio hare)

Design
Suzuki Haruna
(Design Studio hare)

印刷
株式会社ライブアートブックス
(株式会社大伸社)

Printed by
Live Art Books Inc.
(Daishinsha Inc.)

発行
東京国立近代美術館
〒102-8322
東京都千代田区北の丸公園3-1

Published by
The National Museum of Modern Art, Tokyo
3-1 Kitanomaru-Koen, Chiyoda-ku, Tokyo
102-8322

©2023 東京国立近代美術館

©2023 The National Museum of Modern Art, Tokyo

MOMAT支援サークル
株式会社木下グループ
ラグジュアリーカード
株式会社三井住友銀行
三菱商事株式会社
大日本印刷株式会社
アバントグループ
株式会社オオバ
日本電子株式会社

MOMAT Corporate Partnership:
Kinoshita Group Co., Ltd
LUXURY CARD
Sumitomo Mitsui Banking Corporation
Mitsubishi Corporation
Dai Nippon Printing Co., Ltd. (DNP)
AVANT Group
OHBA&CO
JEOL Ltd